

研究ノート

1962年の彭徳懐への外国内通批判に関して —批判内容の変遷との関係性について—

杉田 徹*

論文要旨

彭徳懐は中华人民共和国の国防部長を務めた軍人であった。1959年の廬山会議にて、当時の最高指導者毛沢東へ「彭徳懐同志的意見書」なる私信を作成し批判され、事実上の失脚処分となった。この失脚に関して様々な事由が検討されてきた。

本論では、失脚事由の一つである外国内通に焦点を当て、その外国内通批判の経緯と内容を分析した。まず従来の先行研究で指摘されてきた中ソ対立の悪化が失脚に関連していたとする点から中ソの対立要因を概観した、次に外国内通批判の直接的契機とされるソ連東欧を訪問した軍事訪問団の過程、廬山会議での批判決議、七千人大会での劉少奇講話を分析した。この中で、中ソの対立要因からは彭徳懐の失脚要因は見いだせず、また58年中共中央軍事委員会で教条主義者として批判された蕭克が逆に彭徳懐を教条主義者として批判していた。訪問団の行程からも外国内通したとする証拠は見いだすことはできなかった。そして廬山会議での決議と七千人大会での劉少奇講話との比較から、問題とされた意見書が事実と認められた一方で新たに「外国との背後関係」があるために批判されたと失脚事由に、外国内通が添加されることになった。

本論の結論は、この外国内通批判は廬山会議後の1962年の七千人大会にて公式的に登場し、新たに外国内通が罪状に添加された、七千人大会では大躍進政策の総轄として廬山会議時に彭徳懐が提起した意見書と共通する政策変更が行われたが、指導部の責任追及はなかった、それゆえ彭徳懐に対する外国内通批判は政策転換を果たすために必要な責任追及を逃れるためのスケープゴートであったのではあるまいか、というものである。

キーワード

彭徳懐, 廬山会議, 七千人大会, 軍事訪問団, 外国内通, 教条主義

I. 問題の所在¹

彭徳懐は、建国前には国共内線で建国後には朝鮮戦争で活躍し、中華人民共和国（以下中国）の国防部長を務めた軍人であったが、1959年江西省廬山で開かれた通称廬山会議²にて、

* 執筆者：杉田 徹

所属機関：法政大学政治学研究科博士後期課程

機関住所：〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1

E-mail：tsugita@f2.dion.ne.jp

「彭徳懐反党グループに関する中国共産党八期八中全会の決議」³（以下決議）が出され、事実上の失脚処分となった。この事件から早50年が経過し、当時の毛沢東の廬山会議上での批判演説⁴も公開され、ほぼ当時の状況が解明されつつある。ただ興味深いのは、国防部長であった彭徳懐が大躍進政策⁵という毛沢東が情熱的に推し進めた政策の是正を求めた「彭徳懐意見書⁶」なる私信を出したことが発端となって批判された失脚過程から、この失脚には公表された失脚理由とは別の事由が存在するとされ様々な要因が検討されてきた。検討された要因としては核開発問題、中ソ対立、軍関係の問題等である。

現在中国側の研究では、廬山会議での毛沢東の怒りの原因、即ち彭徳懐失脚の要因はフルシチョフの大躍進批判が原因だという研究⁷が出されている。彭徳懐の出した私信がこの怒りの炎に油を注いってしまったがゆえに、毛沢東に批判され失脚したとしている⁸。またフルシチョフの大躍進批判が失脚の原因だとするのならば、彭徳懐と外国との関係を疑う内通疑惑が生じるが、中国側の研究では彭徳懐が外国に内通したことは否定されている。ただ廬山会議中の8月1日から彭徳懐に対し「外国内通」⁹の疑いが示唆されていた¹⁰。廬山会議前に彭徳懐はソ連東欧を訪問し、アルバニアでのフルシチョフとの会談で大躍進政策の問題点を語り、帰国直後に廬山会議に参加し政策に反対する意見を述べたことに起因して批判を受けたとされている¹¹。過去のプロレタリア文化大革命期に毛沢東の赤い衛兵として「紅衛兵」¹²と呼ばれた集団により作成された「紅衛兵資料」でも彭徳懐の外国内通に関する批判が存在していた。こうした「紅衛兵資料」等から、西側の研究では1958年の電波塔・共同艦隊建設の失敗、中ソ新国防援助協定を巡る問題、中共中央軍事委員会拡大会議等の中ソ関係悪化の要因とされる事例から、核問題や中ソの軍事関係が彭徳懐失脚に関係したと推測されてきた¹³。これらの研究と中国での外国内通に関する批判とこれらの研究結果とは意味合いが少々異なる。中国側で出された批判や研究は外国訪問での内通行為が問題とされているのに対して、西側では中ソ関係の悪化が彭徳懐失脚に影響したのではないか、という点で異なっている。つまり、外国内通行為自体を問題とする中国の研究に対して、1958年から59年にかけての軍事的問題を中心とする中ソの関係悪化が彭徳懐の失脚に何らかの影響を及ぼしたとする点の違いである。西側の先行研究で揭示された要因についてはⅡの中で、外国内通に関してはⅢ以降の中で詳しく論じる。

現在の中国側の研究では、彭徳懐の外国への内通行為自体は否定しているが、内通批判が出された要因まで考察したものは少ない。これらの研究に共通している点は内通の事実を否定し、廬山会議では彭徳懐は外国内通を示唆され、そして1962年の「七千人大会」において劉少奇が講話の中で彭徳懐には「外国の背後関係がある」との内容を述べたという点だけで考察¹⁴を止めている。彭徳懐の内通を否定すること、即ち名誉回復に力点が置かれ、内通批判の反面である彭徳懐が批判され失脚した理由が外国内通に変更された要因への検討は行われていない¹⁵。この点が中国側の研究と本論の主題とは異なる点である。また本論と同じ視点で分析している専攻研究も存在する¹⁶が、本論の結論とは異なる結論を示している。

こうした先行研究の業績を踏まえて、本論が着目したのはこの批判内容が出された背景とその事由である。つまり何故に彭徳懐は国家的な英雄である十大元帥から「外国内通者」として批判されることになったのであろうか。結局名誉回復こそされたが、未だに彭徳懐に関する決議までは採択されていない。この背景は何かという点に本論の問題意識が存在する。

最初に結論を述べれば、彭徳懐に対する1962年の外国内通批判は、彭徳懐をスケープゴートするための批判であったのではないだろうか。つまり廬山会議時には批判された「軍事倶楽部」のメンバーとされた仲間と共に寛大な処置で処遇するとされたが、62年の「七千人大会」にて彭徳懐意見書は内容が事実と認められ意見書の内容は肯定される、しかし彭徳懐には仲間と違い、外国の背景がある「外国内通者」として再批判されてしまい、彭徳懐は廬山会議とは異なる罪状として「外国内通」を背負うことになった。廬山会議で問題となった内容から新たに罪状が加えられ、その内通批判が出された要因は、廬山で問題視された彭徳懐意見書の内容は事実とされたことに鑑みて、当時の指導部が責任回避の道筋を作るためではなかったのだろうか。

本論では、西側で指摘された1958年から59年にかけての中ソ間の軍事的問題を中心とする関係悪化を概観し彭徳懐の廬山会議での失脚に関係があったのかを検討する。次に59年の軍事訪問団での行動に内通行為が存在したのかという点を検討し、廬山会議での決議の中で文革期に公開されなかった内容と劉少奇の「七千人大会」での「拡大中央工作会議における講話」内容を比較検討する。最後にこれらの点から結論を述べる。

また彭徳懐が執筆した資料、彭徳懐内通批判に関連する資料、本論が使用した資料について付記する。まず、彭徳懐が直接執筆したとされているものは、「彭徳懐意見書」と呼ばれる廬山会議時に出された私信、日記¹⁷、1962年の拡大中央工作会議における報告以後に書かれた『八万言の書』、この一部分¹⁸が使われている『彭徳懐自述』¹⁹（『ある元帥の回顧録』²⁰）と『彭徳懐軍事文選』²¹となっている。この『八万言の書』²²には、「私と外国人の一切の接触過程」という章があり、1958年までの内通問題について書かれているとされているが、この該当箇所は『彭徳懐自述』には掲載されていない。次に彭徳懐内通関連するものとして『關於彭徳懐反党問題審査報告』²³や1978年に華国鋒が正式に彭徳懐の外国内通を否定した文章も非公開である²⁴。最後に本論にて使用した資料は、廬山会議時の決議は公表された当時は一部が抜粋されていた²⁵ため、内部向けに編纂された『中共党史教学参考資料』²⁶の資料から引用した。「七千人大会」での「拡大中央工作会議における講話」は『中国文化大革命文庫』より講話資料を引用した。詳細については、V「七千人大会での劉少奇講話」の中で詳しく論じる。

II. 1958年から1959年にかけての中ソの問題と彭徳懐の失脚に関して

1958年から1959年にかけて中ソ間の関係は悪化し始めていた。中ソ関係の変化が彭徳懐失脚

に影響したのかという点が、前述の通り西側の先行研究で推察されていた。確かに彭徳懐は国防部長であり、中ソの軍事面で深い関係があったであろう。ただ新国防技術協定や中共中央軍事委員会拡大会議での「教条主義」批判²⁷、電波塔や共同艦隊の問題からは彭徳懐の失脚に関する要因は見つけられず、むしろ1958年の中共中央軍事委員会で教条主義者として劉伯承と共に批判された蕭克の事例からは路線闘争の中で発生した教条主義批判を彭徳懐に転嫁させただけなのではあるまいか。

1957年11月に彭徳懐は軍事訪問団を率いてモスクワを訪問していた、また同時期に毛沢東自身もモスクワに訪問していたが、この時期に締結された新国防技術協定は彭徳懐訪問前に既に締結されていた²⁸。国防部長として新国防技術協定締結に関与したであろうが、失脚との関連はみられない。

1958年5月中共中央軍事委員会拡大会議²⁹が開催された。この会議開催前の1957年から南京軍事学院において教条主義問題が存在し、彭徳懐が介入した。1958年3月成都会議後に林彪が北京に戻った後、訓練総監部4級幹部会議で蕭克と論争となり、林彪は蕭克が教条主義批判に反対していると毛沢東に報告し、このため軍事委員会拡大会議での批判には林彪が暗躍していたとされている³⁰。

中共中央軍事委員会拡大会議の前半部分では粟裕に対する批判、後半部分では軍事学院長の劉伯承と蕭克への「教条主義」批判³¹があり、蕭克は総参謀長を解任させられる。

つまり、この会議では「核開発」に通ずる路線対立ではなく、確かにソ連の経験に偏重する姿勢を問題とした「教条主義」が批判されたが、実態は劉伯承・蕭克への批判であった。確かにソ連の経験を巡る対立であるため教条主義はソ連に関係するが、林彪の介入という点からみれば階級闘争の要因が強い。問題は、教条主義者として批判されたはずの蕭克が1961年の報告の中で「XXX、XXX同志が軍事委員会工作を主催した期間、毛主席の建軍原則に違反し、教条主義、単純な軍事観と軍閥主義の資産階級軍事路線を極力推進した³²」と今度は新たな教条主義者を創造して批判し返している点である。このXXXは彭徳懐と黄克誠であろう。つまり、当初は劉伯承・蕭克への批判であったのにも関わらず、批判対象がすり替わっている。

さらに電波塔や共同艦隊に関しても、沈志華の研究に依拠³³すれば、中ソ関係が彭徳懐失脚に直接的に影響したとは言えない。『建国以来毛沢東文稿』によれば1958年6月7日に電波塔建設を巡る予算やイニシアチブをとるよう指示が出されている³⁴。共同艦隊と核潜水艦を巡る問題や金門島砲撃の問題でも、彭徳懐は国家の政策上の仕事として携わっていたが、このことがソ連に内通した証拠や失脚につながる要因とすることは論理的飛躍が出てしまう。むしろ蕭克が教条主義者として批判されたが、廬山会議後に彭徳懐を教条主義者として批判し返し、こうした批判が時代と共に拡大されて「紅衛兵資料」で彭徳懐批判の一つとして示された「彭徳懐は軍の近代化に反対した、フルシチョフ修正主義に従属した³⁵」となるのではないだろうか。こうした批判の拡大が発生した要因は、単に意趣返しではなく、別の意図が存在したので

はないだろうか、その点については、外国内通批判の事例から検討する。

Ⅲ. 1959年初夏の軍事訪問団について

前述の通り、中国側の研究や回顧録³⁶では1959年のソ連・東欧への軍事訪問で彭徳懐がソ連に内通したとする説は否定されている。しかし一部の先行研究ではこの軍事訪問期間にソ連との軍事交渉のための接触があったと推察され、彭徳懐を批判する紅衛兵資料では内通行為があったとしている。この内通行為があったとしているのは、アルバニアでの彭徳懐とフルシチョフの会合などでの同席であり、『彭徳懐伝』ではこのアルバニアでのフルシチョフとの会話の中で大躍進政策について問われ、問題点もあると述べたと返答したことが要因としている³⁷。

そこで、本論では、「内通」とされる行為を批判する内容、そして中国外交部の外交档案資料や同行した通訳の回顧録などを比較し、ソ連側と核や軍事部門の交渉が存在したのか、また軍事訪問期の内通行為について推察する。「内通」とされる行為については、先行研究の指摘と紅衛兵資料から抽出した批判材料を中心に検討する。

訪問団の概要は以下の通りである。訪問団の目的は、中ソの団結を東欧に示して欲しいというソ連の要求であったとされている³⁸。彭徳懐以外の団員は、王樹声、張宋遜、蕭克、楊得志、陳伯鈞、陳熙、張学思、路揚、朱開印、馮征、鄭文翰、(通訳として章金樹、孫立忠等が同行した)であった。党細胞の書記は蕭克である。それゆえ蕭克が帰国後に訪問団の総括報告を行っている。訪問期間は、1959年4月24日から6月12日で、訪問国は、通過・訪問順に、ソ連、ポーランド、東ドイツ、チェコスロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、アルバニア、ソ連、モンゴル、の合計9ヶ国である。なお途中までは張聞天もワルシャワ条約機構外相会談のため、同じ飛行機に同乗している³⁹。

紅衛兵資料で1959年の外国内通が批判されている内容は、以下の通りである。

まず彭を外国内通者として批判している。紅衛兵資料はどのような点を論拠としているのだろうか。

「1959年5月、フルシチョフは彭徳懐と会談するために、アルバニアを10日早めて訪問し、彭徳懐とアルバニアで三度も面会し、二度長時間会談し、彭徳懐はフルシチョフに探った情報を送った、フルシチョフは彭徳懐に対して一緒に祝杯をあげて直接行動指針を与え、意気盛んに談笑し、また一緒に踊り、一時は宴会ホールで人目を引いた⁴⁰。」

フルシチョフは予定を早めてアルバニアを訪問し、またチェコにて「三面紅旗」政策⁴¹を批

判し特殊な待遇を受けたと批判している。

第一に、外交档案資料によればフルシチョフのアルバニア訪問日程に関しては、アルバニア中国大使館の情報も二転三転している。これはフルシチョフが彭徳懐に会うためというよりは訪米を控えており、フルシチョフ側の訪米日程が影響したのであろう⁴²。第二に、確かにフルシチョフと彭徳懐は会っているが、それらは紅衛兵資料で指摘されているような内容とは若干意味合いが異なる。つまり、確かに宴会で「同席」しているが、同じ会合に参加していても、密談というよりは宴会で顔を合わす程度の「同席」と推察する。

通訳として同行した孫立忠の回顧録では、チェコでの待遇、アルバニアでのフルシチョフらソ連党政代表团との接触について以下のように書いている。フルシチョフとの接触は、合計三回あり、5月28日晚、ダイダホテル(原文：達伊特大飯店)にて、大歓迎会が開催され、参加者の中にフルシチョフらソ連党政代表团も参加していた。深夜12時過ぎに終了した⁴³。5月30日午後、フルシチョフ等ソ連党政代表团は、大衆集会を開催し、中国軍事代表团も参加し、ボヅジャ、フルシチョフが講話を行った⁴⁴。5月30日晚、ダイダホテルにて、アルバニア側が主催し歓迎会が開催され、ソ連党政代表团フルシチョフ・マリノフスキーも参加した⁴⁵。

上記の状況から鳥瞰すると、彭徳懐の1959年のソ連東欧訪問が軍事部門の交渉のために行われた可能性は低いであろう。第一に、宴会で同席するのと会談で会合するのとでは意味合いが異なる。第二に、1959年6月20日の中ソ新国防技術協定破棄の影響は、彭徳懐失脚よりもフルシチョフのアメリカ訪問と軍縮問題に関係して、中国側に核兵器の技術提供を出来なくなったことにあったのではないだろうか。第三に、この訪問団の行動からは軍事部門での交渉が行われるような緊張した雰囲気はなく、訪問団員が訪問先で遊覧し、買い物に興じる姿⁴⁶からは秘密裏に外交交渉を行っていたとは考えにくい。第四に、紅衛兵資料の内容は、日付や会談などの形式的な内容自体は事実に基づいているが、批判内容は拡大解釈して批判の精度を高めようとしている。例えば、アルバニアでのフルシチョフとの会談については、彭徳懐が参加を希望せず周りの説得で参加するも、途中退席したことが証言されている⁴⁷上に、宿泊先も違い長時間密談したとは言い難い。第五に、彭徳懐以外の団員にも同様の嫌疑がかかるはずが、彭徳懐以外の団員にはかかっていない。特に問題となるのは、党細胞書記であった蕭克であろう。前述の通り、1958年の中共中央軍事委員会教条主義者として批判されたにも関わらず、疑いの目は向けられないのである。

彭徳懐に対する外国内通批判が、事実と異なる可能性が高い内容であると言えよう。ただし、外国内通者にしろ、外国で内通行為が無かったにしろ、むしろ問題はその後にある批判行為がある。なぜこうした批判が出されたのか、批判を出す背景は何であったのだろうか。その点についてはIVで分析を行う。

IV. 「彭徳懐反党グループに関する中国共産党八期八中全会の決議」について

中国側の研究では、毛沢東は1959年7月フルシチョフがポーランドのボラチェフ農業合作社で語った内容が農業合作社批判だと感じ、廬山会議での7月14日の彭徳懐の意見書を内部からの攻撃と捉え、失脚にも影響したとされている⁴⁸。

前述の通り、廬山会議中から彭徳懐に対する外国内通批判は存在した。8月1日の常務委員会で彭徳懐は毛沢東から疑いをかけられており⁴⁹、『廬山会議実録』でも疑いをかけられている点が明示されている。例えば、「スターリンに攻撃した後で、フルシチョフに敬服した⁵⁰」などが内通を暗示させる。つまり、毛沢東はフルシチョフに対する疑念があり、それゆえ彭徳懐に対しても廬山会議で外国内通に関しての批判ととれる内容の発言をしていた。

こうした状況の中で、廬山会議時に出された彭徳懐を批判する決議には外国内通を示す言葉が記載されているのだろうか、前述の通り、彭徳懐の外国内通の可能性は低かった、ただし廬山会議中から彭徳懐の内通を批判、示唆する発言はあった。この点から廬山会議終了時の決議で、彭徳懐への外国内通批判が存在したのかに着目し、彭徳懐に対する決議内容を考察する。

廬山会議中の1959年8月16日に出された「彭徳懐反党グループに関する中国共産党八期八中全会の決議」(以下、決議)は文化大革命中の1967年8月の『人民日報』にて公開されたが、抜粋されており全文は公開されていなかった。本節では、『中共党史教学参考資料』より引用した全文が掲載された決議文より、抜粋された箇所⁵¹を中心に考察を行う。この決議文は毛沢東により執筆され修正がなされている⁵²。この決議文の内容は、五つの部分に分かれおり、状況説明、要因、問題点、軍事倶楽部⁵³に対する今後の対応などの事柄が書かれている。

決議が出された要因の説明は、「(二) 彭徳懐同志をリーダーとする反党集団が党を分裂される活動を進めていた、その要因は古い。彭徳懐同志は廬山会議前期、すなわち1959年7月14日に毛沢東同志に書いた意見書、廬山会議期間中の一連の発言と談話は、右傾機会主義分子が党に向かって侵攻しているのを代表している綱領だ。それらは、表面上は総路線を擁護し毛沢東同志を擁護していることを偽装しているだけではなく、実際上は却って党内の右傾思想分子、党に対しての不満分子、党内の日和見主義者と階級異分子を煽動していて、国内外の反動派に呼応して、党の総路線に向かって、党中央と毛沢東同志の指導に向かって、名誉を損なわせる、凶暴な攻撃をおこなった。彭徳懐同志は、あれらの暫時的、局部的、早くも克服したあるいはちょうど克服している最中の欠点を収集してきた、かつその上、極めて誇大に、我が国の目前の形成を真っ暗闇のように描いた。彼は、実質上総路線の勝利を否定し、大躍進の成績も否定した、人民公社運動に反対した、経済建設中の大衆運動にも反対した等の社会主義建設事業の指導を「政治優先」と反対した。彼の意見書の中には、公然と党と数億の人民の革命の情熱を「小資産階級の熱狂性」と汚し、ひいては談話の中で再び公言した「例えば中国労働者農民が良くならないなら、すでにハンガリー事件が発生して、ソ連の軍隊に来てもらうことになっ

た」と大変明らかである、彼が犯した間違いは個人の性質の間違いではなく、かつ反党、反人民、反社会主義性質を帯びた右傾機会主義路線の誤りであった。」⁵⁴である。

ソ連との関係性については、冒頭で「この攻撃は、我が国の大躍進、人民公社という偉大な運動における、一時的、局部的なある欠陥につけこんで、内外の反動勢力が我が党と我が国の人民にたいする攻撃に拍車をかけていた、ちょうどその時に行われたのである。このような時機においては、党内、とりわけ党中央の内部からの攻撃は、明らかに党外からの攻撃よりいっそう危険なものである。」⁵⁵程度しか書かれていないのである。

そして、この決議部分の中で、抜粋版から削られた部分は六箇所ある⁵⁶。

「高崗は、計略上毛沢東同志を擁護しながら、劉小奇同志と周恩来同志に集中して反対した：かつ彭徳懐同志は却って毛沢東同志に直接反対し、同時に中央政治局常務委員のその他の同志にも反対し、同政治局の絶対多数と対立した。」⁵⁷

「彭徳懐同志は、マルクス主義者の看板をあげていて、口では社会主義を語っているが、実際上の頭の中は資産家階級の個人英雄主義、資産階級の極端な虚偽の所謂「自由平等博愛」思想、かつまだ封建的な残りかすがある。」⁵⁸

「彼の世界観が同革命である以上無産階級のマルクスレーニン主義とはまったく相容れない、その（多くの方面で）方向を間違え、彼は当然党内においても毛沢東同志をもってマルクスレーニン主義の代表となす指導を受け入れなかった。」⁵⁹

「〔彭徳懐同志は、実質上一人の党内の資産階級革命家である以上、彼は資産階級民主革命の中でまだ積極的であり、帝国主義およびその手先に対しての党争はまだ堅持している。しかし、彼は無産階級のマルクスレーニン主義の世界観、人生観と思想方法を掌握していないから、民主革命の大衆運動を迫害し、彼は民主革命に対しての方法も常々誤りを犯していて、幾つかの重大な路線の誤りも含まれている。……社会主義が真に到来し、資本階級と小資産階級の生産手段私有制が終わらせられた時に、彼の資産階級思想は反抗せざるをえなくなる。だから、〕農業、手工業、資本主義工商を社会主義改造したばかりの時に、彼は高崗と同じく結合して反党活動を進行させてきた。」⁶⁰

「（同時に、彭徳懐同志は過去の党の正確な指導下において有益な革命の仕事をしてきたと言う見地から、……、党の援助から、まだ後ろを振り返ることが出来

る。彼はすでにこの全会大会上に出た自己の誤りを是正したいと表明している点を鑑みて、)⁶¹八期八中全会で認められた：党は彭徳懐同志に対して依然としてあふれるばかりの熱情での態度を用いるべきであり、彼の認識と自己の誤りを是正するのを援助する。(そこで党は依然として「団結からの出発を希望し、批評あるいは闘争を経過し、矛盾にて解決出来る、新しい基礎の上から新しい団結に到達する」方針と「以前の失敗を戒めとして将来に対し注意を加え、欠点や過ちを批判して立ち直るのを助け」、[批判は厳しく処置は寛大に]の方針により、彭徳懐同志が自己の誤りを認識し是正する条件下で、彭徳懐が同志の団結を保持することを継続することを希望する。その他の彭徳懐同志と共に誤りを犯した黄克誠、張聞天、周小舟などの同志に対しても党は同様の方針をとる。)⁶²

上記のカギ括弧、ないしはカギ括弧内の丸括弧部分が削られた内容である、「多くの方面で」の一言が削除された箇所もあれば、かなりの長文が削除された箇所もある。上記の通り、『人民日報』に掲載された内容から削除された部分は、彭徳懐が政治局の多数と対立した点、彭徳懐の政治思想が資本主義的である点⁶³、多くの方面で方向を間違え、彼は当然党内においても毛沢東同志をもってマルクスレーニン主義の代表となす指導を受け入れなかった点、社会主義が真に到来したため、彭徳懐の資産階級思想は反抗せざるをえなくなり、反党活動を進行させた点、過去の功績から立ち直るのを助けるとした点、その他の彭徳懐同志と共に誤りを犯した黄克誠、張聞天、周小舟などの同志に対しても党は同様の方針をとるとした点である。

この決議が公表された1967年当時は、彭徳懐を攻撃する意図で公開されたものと推察され、それゆえ彭徳懐を攻撃する上で都合の悪い部分を削ったと推察する。例えば、彭徳懐に対する「減刑」部分や彭徳懐の過去の功績を認めている部分である。しかし、それ以外の部分でも削られている。例えば、政治局の多数と対立した、仲間と同様の方針をとるとした点である。この部分は、彭徳懐を攻撃する意図から見れば問題のない内容であると推察されるが、削られている。理由は、Vの中で検討する。

前述の通り、廬山会議中に外国内通は批判されている⁶⁴が、この決議に記載がなかった。また決議の中で「八期八中全会では大量の事実が暴き出された」と記載されているにも関わらず「内外の反動勢力が我が党と我が国の人民にたいする攻撃に拍車をかけていた、ちょうどその時に行われたのである。」⁶⁵程度にしか書かれていない。つまり、この公式の決議文からは、彭徳懐に対する外国内通批判は示唆程度であり、廬山会議直後には、外国内通に関する表現は直接的には出てこないのである。この決議文では、彭徳懐は社会主義者として不適格でクループを形成し、手紙等で党と毛沢東に対して批判・攻撃を行ったため、職務停止とするというものであった。

また、同時期に毛沢東は1959年9月11日、廬山会議後に開かれた彭徳懐・黄克誠を批判する

中共中央軍事委員会拡大会議と張聞天を批判する外事会議上⁶⁶で講話を行った。その内容は『毛澤東思想萬歳』⁶⁷に収録されている。

彭徳懐の外国内通批判に関係がある部分としては「絶対に祖国に背き、外国と内通してはならない。同志達が会議を開いて、このことを批判したのは、諸君が皆共産党の組織であり、マルクス主義者であるからだ。一つの集団が他の集団を破壊するのは許されないことだ。我々は、中国の共産党員が出かけて行って外国の共産党組織を破壊し、一部の人々をそそのかして、他の部分の人々に反対するのを許さない。それと同時に、我々は、中央に背いて、外国の挑発を受け入れるのをやはり許さない。」⁶⁸との部分である。

この毛沢東の講話でも上記の決議と同様に、ソ連内通に対する批判はこの時点ではまだ示唆程度で、彭徳懐の外国内通を断言していない。内通を断言出来なかった理由は、『彭徳懐伝』によれば何ら証拠が出てこなかったとしている。⁶⁹つまり、彭徳懐が内通していたという具体的な証拠は出てこず、毛沢東の講話では限定的に臭わせる程度に留まったのである。では、いつからこの外国内通批判が公式的に批判されるようになったのだろうか、先行研究によれば、1962年の七千人大会での劉少奇講話からであるとされている。次節では、この劉少奇講話でどのように彭徳懐外国内通批判が行われたのかについて考察する。

V. 七千人大会での劉少奇講話

前述の通り、廬山会議の決議、毛沢東の講話からは、彭徳懐が外国に内通したとは示唆程度でしか記載されていない。先行研究では1962年1月の七千人大会での劉少奇の発言に関連があるということ⁷⁰である。なぜ彭徳懐が外国に内通したとして批判されたのか、1962年の問題となる劉少奇の講話、そして外国への内通行為が失脚の理由として追加された要因を考察する。

この七千人大会では、建国以来12年、特に大躍進の総括が主要な議題であった。そこで劉少奇一人が書いた書面報告（「拡大工作会議における報告」）を21人の起草委員会が第二稿を執筆し、劉少奇が1962年1月27日にこの書面報告の補充説明を行った⁷¹。この講話が「拡大中央工作会議における講話」である。そして、書面報告は会議後に第二稿をさらに修正、補充したのが「拡大工作会議における報告」（第三稿）として出されている⁷²。

本論で使用したのは、「拡大中央工作会議における講話」である。『劉少奇選集』収録されている「拡大中央工作会議における講話」「拡大工作会議における報告」ともに、彭徳懐の外国内通に関する記載はない⁷³。ただ他の中国の先行研究⁷⁴で示された内容、彭徳懐がこの講話内容に関する反論として「八万言の書」を執筆した点から、「七千人大会」にて劉少奇が外国内通に関する発言をしたと推察される。そこで本論では香港中文大学が収集した「紅衛兵資料」を電子化した『中国文化大革命文庫』⁷⁵より引用している。そこには、先行研究で示されていて、『劉少奇選集』には記載がなく削除された可能性のある部分の記述があり、二つのパラグラフ

に分かれている。第一のパラグラフでは彭徳懐の反党集団の形成、第二のパラグラフでは軍事倶楽部メンバーと彭徳懐との差異についてである。

「……彭徳懐同志が1959年の廬山会議期間に、毛沢東主席に一通の手紙を書いた。我々は廬山会議上で進行した彭徳懐同志の右傾機会主義反党集団の闘争に反対した。……ただ彭徳懐同志のあの手紙の表面上から見ても、手紙の中で述べられていた具体的な事情については、やはり事実と符合する内容は多い。一人の政治局委員が中央の主席に書いた手紙は、例えば中にある意見が正しくなくとも、決して間違いを犯すはずはない。問題は彭徳懐同志が手紙を誤って書いたことではなく、問題はここではないのだ。廬山会議において彭徳懐の同志反党集団が反対闘争を展開したのは、長期にわたって彭徳懐同志が党内に一個の小集団を形成していたからだ。彼は、高崗・饒漱石反党集団に参加し、高饒反党集団に反対した時に、彼は口を出さなかった。彼は高饒集団の残存勢力だ（毛主席、周恩来同志が挿話：主要なメンバーだった。）この集団の主要メンバーだった。だから、毛沢東主席は廬山会議上で言った：結局高饒連盟だ、もしくは高彭連盟か？おそらく高彭連盟であるべきだ。（毛主席が挿話：彭と高、実際上の首領は彭だ。）さらに重要なのは高崗が彭徳懐を利用したのではなく、かつ彭徳懐が高崗を利用したのだ。彼ら二人には国際背景があり、彼らの反党集団活動には某外国人が中国において転覆⁷⁶活動と関係がある。……」

第一パラグラフでは、彭徳懐意見書に書かれている内容が事実に符合していることが多いとしている点と意見書を書いたことが問題ではないとしている点、彭徳懐は同じ小集団を形成しておりそのために打倒したという点、高崗と彭徳懐二人には国際背景があり、背後には外国の存在があったという点、そして「彼らの反党集団活動には某外国人が中国において転覆活動と関係がある」とされている部分は、前文から読めば彼らとは高崗と彭徳懐を示している点である。ここでの彼らは、彭徳懐と軍事倶楽部のメンバーではないのである。こうした内容は、彭徳懐を批判するために書かれた紅衛兵資料では「彭徳懐の反党集団綱領は事実と符合する」「誤りと数えるほどではない」と書かれている⁷⁷。また、こうした高崗に関する問題に関してはすでに指摘されている通り⁷⁸、文革期において劉少奇も同様の批判を受けた可能性から、論難である可能性が高いのでここでは除くことにする。

「彭徳懐同志があの手紙で指摘した一切の事情は、党中央が自ら早くから話していたものだった、……廬山会議中期に至って、彼はやっとあの手紙を取り出した、これは何を意味するのか。

……我々の工作の中の欠点と誤りを利用することを企み、党に向かって大挙して侵攻し、彼個人と彼の小集団が党を奪い取るのが目的だった。彭徳懐同志が党を奪い取ることを思ったのは、これには廬山会議においてあの場で闘争が展開される必要があったのが根本的な理由だった。ここにおいて一点はっきり述べる必要があるのは、目的がああ同志等と彭徳懐同志では区別されていた。あれらの同志もまた彭徳懐同志が語ったのと大差がない話を語った、……しかし、これらの同志と彭徳懐は一緒ではない、彼らはこれらの話を述べることは出来た、だから彼らは反党集団を組織していない、党を乗っ取る必要がなかった。(毛主席挿話：国際的な背景がない) 彭徳懐同志は、軍事代表団を国外に何ヶ月か率いていた、帰国後、すぐに忙しくあわただしくあの手紙を計画したのか、陰謀があったのだ。当然状況を理解出来ない同志には、はっきり見えなかった。廬山会議の時期、あゝ同志もはっきり見えず、彼らを怪しむことも出来なかった。」

第二パラグラフでは、彭徳懐と軍事倶楽部のメンバーの差別化が行われている。つまり、「彭徳懐同志は、軍事代表団を国外に何ヶ月か率いていた、帰国後、すぐに忙しくあわただしくあの手紙を計画したのか、陰謀があったのだ。」と彭徳懐には国際的な背景があることを強調され、一方で「これらの同志と彭徳懐は一緒ではない」、彭徳懐以外の軍事倶楽部のメンバーには国際背景がなく、それゆえ、「反党集団を組織していない」となるのである。この講話により、彭徳懐には国際的な背景がある、つまり外国内通が明確に示されたのである。

この講話では、最初は過去の高崗との関連で高崗と彭徳懐には外国の背後関係があったと批判している。また、廬山会議期と「七千人大会」では、中国のソ連に対する批判が強まったと推察することができる。つまり、こうした批判は彭徳懐だけでなく裏を返せば、彭徳懐を内通させたソ連に対する批判でもあり、それらは59年8月に比べて、62年1月段階で強まったと推察出来るのである。⁷⁹ソ連側はこうした批判に対して、中国の反ソ宣伝の理由の一つは、困難な政治状況から目をそらすためであり、自分のあらゆる困難の責任を「敵」として、その敵を「国内の敵」、特に「国外の敵」に転嫁させることに唯一の抜け道だとしていると批判している⁸⁰。ただし、これは中国とソ連との関係が変化しただけであり、なぜに彭徳懐に対して批判の変化が起こったのかという説明にはなりえないのである。

次に、この講話では意見書に対する正当性が認められている。廬山会議で「右傾機会主義の提綱」とされた彭徳懐意見書は、大躍進政策の成果と教訓が総括された内容であり、経験不足や大躍進政策の熱狂に浮かれた姿勢を問題としている。この講話では、問題は意見書に関する事由ではなく、彭徳懐が小集団を形成し、その目的が党権力を奪おうとしたことが問題であるとしている。さらに、他の同志等(つまり、張聞天、黄克誠、周小舟等の軍事倶楽部メンバー)については反党集団を形成していないし、「国際的な背景がない」としている⁸¹。この

講話により、彭徳懐には背後関係に外国の存在があり、外国人による中国共産党への転覆活動に関係があったとされ、彭徳懐は公式的に外国内通を批判されたのである。

VI. 中国共産党八期八中全会決議と劉少奇講話の関係

七千人大会は、大躍進政策の誤りの総括を行った会議⁸²であった。この七千人大会での劉少奇の政策と彭徳懐意見書とは類似点がある⁸³。(図表1参照)

図表1

	1959年「彭徳懐反党グループに関する中国共産党八期八中全会の決議」	1962年七千人大会での劉少奇の講話	考察
意見書と政策の類似性	彭徳懐が廬山会議にて意見書で示した幹部の経験不足、指標の過剰報告、であった。	一点目は、工農業生産指標が高すぎたこと、二点目は集団所有制と全民所有制の境界線を混同したこと、三点目は不適當に権力を下放させたこと、四点目は都市人口が増加しすぎたこと。 誤りの原因は、建設工作の経験不足と党内の多数の同志が謙虚さを失い、党の实事求是と大衆路線の伝統作風に違反し党内生活、国家生活、国民生活と大衆組織の中の民主集中制の原則を削ったため。	彭徳懐が意見書で主張した内容と劉少奇の七千人大会での政策提言は類似点がある。
意見書の評価	「右傾機會主義の提綱」と批判した。	「(意見書の内容は)事実と符合するのは多い」 「意見書を出したことが問題ではない」と否定している。	廬山会議の決議では意見書を否定し、七千人大会では内容を肯定している。
待遇	仲間と一緒の処遇にする	これらの同志と彭徳懐は一緒ではない	廬山会議で彭徳懐と同じように外国内通を示唆された張聞天の事例は異なり、七千人大会後処分されていない。
ソ連への内通説	内外の反動勢力が我が党とわが国の人民にたいする攻撃に拍車をかけていた、ちょうどその時に行われたのである。	(彭徳懐と高崗には)国際背景があり、彼らの反党集団活動には某外国人が中国において転覆活動と関係がある。 彭徳懐同志は軍事代表団を国外に何ヶ月か率いていた、帰国後、すぐに忙しくあわただしくあの手紙を計画したのは陰謀があったのだ	高崗との関係性を提示して、国際背景、つまり内通行為を彭徳懐の罪状に加えている。
会議の流れ	反右傾闘争を展開し、大躍進政策を続行する。	大躍進政策を総括した、劉少奇の報告では、政策の変更の提言があった。	政策を変更するためには、彭徳懐意見書を肯定しなければならないが、彭徳懐を批判した責任を否定するための内通批判ではないのか。

こうした誤りの原因は、建設工作の経験不足と党内の多数の同志が謙虚さを失い、党の实事求是と大衆路線の伝統作風に違反し、党内生活、国家生活、国民生活と大衆組織の中の民主集中制の原則を削ったためだとした。⁸⁴このように、劉少奇講話で示されたものは、彭徳懐が廬山会議にて意見書で示した内容と類似している。

また、決議と異なり、廬山会議での批判者に対する差別化も行われた。黄克誠は廬山会議で失脚した人達は名誉回復されなかったとしている⁸⁵が、確認できた張聞天の事例は少々異なっている。張聞天は、七千人大会以後、9月12日に外国内通についての異議を申し立て⁸⁶、1963年4月1日では問題ないとされた⁸⁷。この点は七千人大会での劉少奇講話の内容通りである。つまり、決議と異なり、彭徳懐と軍事倶楽部メンバーは同様に処分されず、劉少奇の講話で示された通り批判者の差別化が行われた。

こうした点から、七千人大会にて政策を修正するためには、彭徳懐の意見書の内容は肯定しなければならないが、彭徳懐そのものは否定しなければならない。なぜなら彭徳懐自身を肯定すれば廬山会議で批判した責任問題が発生するからである。その責任の矛先は、中国共産党の中心毛沢東だけでなく、劉少奇や周恩来等も含まれる。こうした理由から彭徳懐から正当性を奪わなければならないが、そのために、必要な攻撃が彭徳懐への外国内通批判であったと推察する。

Ⅶ. 結論

彭徳懐への外国内通批判は、政策是正に伴い批判した責任を覆い隠し、政策を修正するために彭徳懐を外国内通者として批判するためのものであろう。

本論では、まず58年前の中ソの軍事関係から外国内通や失脚に関する影響を考察したが、軍事委員会拡大会議で教条主義者として批判されたのは蕭克や劉伯承であり、その蕭克が後に新たな教条主義者を創造した点まで確認出来たが、外国内通との関連は見いだすことが出来なかった。次に彭徳懐の外国訪問での内通行為も資料からは確認出来なかった。これは彭徳懐が廬山会議で述べたとされているとおり、内通したという証拠も内通していないという証拠も「証拠がない」ためである。次に廬山会議の決議内容と七千人大会での劉少奇講話と比較すると、意見書は肯定され、彭徳懐と他の批判対象者との待遇に線引きが行われている。こうした点からみれば、外国内通はスケープゴートのための批判だったのではないだろうか。政策転換を図るためには、新たな仮想敵が必要となったため、彭徳懐と反右傾で批判された集団を分離し、そして新たな仮想敵である外国であるソ連を追加したのではないだろうか。彭徳懐外国内通批判への背景には、七千人大会では大きな犠牲を出した大躍進政策を転換する上で内部の凝集力を高め、新たな仮想敵を創造し再批判することで政策転換を図ったのではないだろうか、これが本論の最終的な結論である。

註

- 1 本論は、2009年度アジア政経学会全国大会で発表した内容に大幅に加筆修正を加えている。
- 2 中国共産党中央政治局拡大会議（1959年7月2日～8月1日）、中国共産党第八期八中全会会議（1959年8月2日～8月16日）の二つの会議を総称して通称「廬山会議」と言う。ただし1961年にも廬山にて中央工作会議が開かれているが、本論で廬山会議という名称を使う場合は1959年の廬山会議を示す。
- 3 歴史決議前と後では名称が異なるようである。決議文が公表された1967年時点での中国語の原文表記では「中国共产党八届八中全会关于以彭德怀为首的反党集团的决议」だったが、現在では「中国共产党八届八中全会关于以彭德怀同志为首的反党集团的「错误的」决议」となっている。本論では、日本側の資料集の日本国際問題研究所中国研究部会編『中国大躍進政策の展開 資料と解説』上・下、日本国際問題研究所、1973-74年 p.107～114の表記に従って「彭徳懐反党グループに関する中国共産党八期八中全会の決議」と表記する。
- 4 矢吹晋編訳『毛沢東社会主義建設を語る』現代評論社、1975年 p.117.
- 5 大躍進政策とは、「いま、社会主義建設の総路線、大躍進、人民公社の三面赤旗を中心とする諸政策を本書では大躍進政策と総称しよう。」と定義されている。日本国際問題研究所中国研究部会編『中国大躍進政策の展開 資料と解説』下巻日本国際問題研究所、1974年 p.452「社会主義の総路線」とは、重工業を最優先し工業と農業を同時に発展させ、偉大な社会主義国家に築き上げることであり、「大躍進」とは当時の生産建設の形勢を表現していて、大胆に考え大胆にやっつてのける共産主義精神の高揚を運動として展開させたものである。当時の「人民公社」は高級合作社を連合して、農業、工業、商業、などの総合的な経営を行う組織であった。
- 6 「彭徳懐意見書」とは廬山会議中に彭徳懐と参謀大尉の王承光が共同で執筆し、毛沢東に送付したところ「彭徳懐同志的意见書」なるタイトルを付けられて印刷配布され、廬山会議において議論の題材となった。王焰主編『彭徳懐年譜』人民出版社、1998年 p.740～741や当代中国人物伝記双書編集部編『彭徳懐伝』当代中国出版社、1993年 p.594～595.
- 7 彭徳懐伝記組著『彭徳懐全伝』中国大百科全書出版社、2009年.
- 8 (前掲)『彭徳懐全伝』(3)中国大百科全書出版社、2009年 p.1255～1256.
- 9 本論で言う「外国内通」とは、中国語では「里通外国」と表記されている。「里通」という言葉の意味であるが、日本語に翻訳すると気脈を通じるという意味から「内通」という言葉で訳出した。この場合の外国とは、彭徳懐に対して批判的な紅衛兵資料ではソ連側のフルシチョフとの関係を指摘しているため、対象をソ連と仮定することが出来るだろう。
- 10 謝春涛著『廬山風雲』中国青年出版社、1996年 p.212, p.253では、廬山会議中に彭徳懐が外国訪問直後に大躍進政策に批判したことを指摘し、さらに8月1日の常務委員会で毛沢東も彭徳懐に向かって疑いを向けたとしている。
- 11 (前掲)『彭徳懐伝』当代中国出版社、1993年 p.679.

- 12 土田真靖「紅衛兵」, 天児慧・菱田雅晴他編『現代中国事典』岩波書店, 1999年 p.271~272.
- 13 例えば, ジョン・ギッチングス前田寿夫訳『中共軍の役割』下巻 時事新書, 1969年 p.124, 安藤正士「中国核武装政策の展開過程(1955-59年) 佐藤栄一編『現代国家における軍産関係』日本国際問題研究所, 1974年 p.246~247, 平松茂雄『現代中国の軍事指導者』勁草書房, 2002年 p.54, DAVID A CHARLSE "The Dismissal of Marshal P'eng The-huai" *THE CHINA QUARTERLY* 1961年 No.8 p.63~76, 徳岡仁「廬山会議-毛沢東と彭徳懐」『東亜』NO.282 1990年12月号 p.38では, 軍事面での対ソ政策が失脚に影響したと推察している.
- 14 ただ2009年に出された『彭徳懐全伝』では, 外国訪問について検討を行い, さらに1959年12月の毛沢東の発言の引用や1962年に批判されたのは劉少奇だけでなく毛沢東の意図があったと指摘した上で, 外国内通自体を否定しているが, この中でも廬山会議での決議と七千人大会での劉少奇講話の間で矛盾が存在している点やその矛盾が生み出された要因への検討がほとんど行われていない.
- 15 これは彭への内通批判の追求が毛沢東・劉少奇・周恩来への批判となってしまうためであろう.むしろ問題は他者批判を利用して体制内凝集力を強化する政治手法の研究とこの手法の弱点の研究では無いだろうか.
- 16 この研究では, 七千人大会での資料の一部が不足している. 黄啓亮『中共四大档案』海風出版社, 1984年.
- 17 廬山会議時期の彭徳懐の「日記」とされる文章は三種類あり, 彭徳懐著「为什么要写信给毛主席」中共中央党史資料征集委員会編『中共党史資料』第28輯中共党史資料出版社, 1988年(国内発行) p.1~7, (前掲)『彭徳懐伝』当代中国出版社, 1993年 p.601・p.612, 中国人民革命軍事博物館編『彭徳懐元帥豊碑丰存中国人民革命軍事博物館陳列文献資料選』上海人民出版社, 1985年 p.585, 586の三種類である. 出所ごとに名称が異なるが, この三篇の資料は, 執筆時期とタイトルの同一性, 注釈の共通性から内容的に異なるが一連の物であると考えられる.
- 18 (前掲)『彭徳懐全伝』(4) 中国大百科全書出版社, 2009年 p.1560~1562.
- 19 彭徳懐著『彭徳懐自述』人民出版社, 1981年, 『彭徳懐自伝』という文献もあるが, 内容は『彭徳懐自述』と同じである. 彭徳懐『彭徳懐自伝』解放軍文芸, 2002年.
- 20 日本語版については『ある元帥の回顧録』と『彭徳懐自述』がある. 彭徳懐著『ある元帥の回顧録』北京外文出版社, 1984年 彭徳懐著・田島淳訳『彭徳懐自述』サイマル出版会, 1984年 このほか, 朝鮮語版も出されている.
- 21 彭徳懐著『彭徳懐軍事文選』中央文献出版社, 1988年.
- 22 (前掲)『彭徳懐伝』当代中国出版社, 1993年 p.641~ p.642.
- 23 彭徳懐專案弁公室によって書かれたとされるこの資料は残念ながら見る事が出来なかった. 王焰主編『彭徳懐年譜』人民出版社, 1998年 p.781.
- 24 (前掲)『彭徳懐全伝』(3) 中国大百科全書出版社, 2009年 p.1255~1256.

- 25 『紅旗』1967年第13期 p.18～20には、抜粋された決議内容が掲載されている。また、『中国大躍進政策の展開 資料と解説』にも抜粋された翻訳が掲載されている。
(前掲)『中国大躍進政策の展開 資料と解説』下巻日本国際問題研究所, 1974年.
- 26 この資料集の紹介については、岡部達味・安藤正士編『原典中国現代史 別巻中国研究ハンドブック』1996年 p.10. この資料に関しては、他の先行研究でも同様の箇所を引用している点からもある程度の信憑性が担保出来るであろう。
- 27 ここで言う教条主義とは、ソ連軍の経験に対して、分析し批判して学習するのか、それとも全部の科学的経験を学習し、その上で初めて批判するののかという点で論争があり、ソ連軍の経験を全部の科学的経験を学習し、初めて批判するという流れを教条主義として批判が起こった問題である。叢進著『曲折発展的歲月』河南人民出版社, 1996年 p.286.
- 28 沈志華『脆弱的連盟』社会科学文献出版社, 2010年 p.206～226 沈志華『中蘇關係史綱』新華出版社, p.193.
- 29 1958年5月27日～6月8日まで粟裕への批判があり、次に6月9日～6月19日まで劉伯承・蕭克の批判があった。彭徳懐が会議の主催人であり、会議主題は周恩来と相談して決定した、その当初の会議の主題は、建軍原則、建軍方針、戦略方針であった。(前掲)『彭徳懐伝』当代中国出版社, 1993年 p.551～552.
- 30 (前掲)『曲折発展的歲月』 p.286.
- 31 朱啓友「毛沢東与1958年中央軍委擴大會議」『党史研究与教学』2007年第一期 p.25.
- 32 江一山編『中共軍事文件彙編』友連研究所出版, 1965年 p.238.
- 33 (前掲)『脆弱的連盟』、『中蘇關係史綱』, また沈志華主編『中蘇關係史綱』社会科学文献出版社を参照した。
- 34 中共中央文献研究室編『建国以来毛沢東文稿』(1958.1～1958.12) 第7冊 中央文献出版社, 1992年 p.265～266.
- 35 (紅衛兵資料) 天津大学「八・一三」紅衛兵批判劉, 鄧, 陶聯絡戰鬪彭兵団『揪出反党, 篡軍老手彭徳懐示衆 - 大陰謀家彭徳懐反革命罪行專輯』1967年8月 p.19.
- 36 朱開印著「廬山會議前陪彭徳懐訪東欧」『百年潮』2005年11期 (CNKIより引用).
- 37 (前掲)『彭徳懐伝』当代中国出版社, 1993年 p.679.
- 38 (前掲)「廬山會議前陪彭徳懐訪東欧」『百年潮』2005年11期 p.11 (CNKIより引用).
- 39 中共中央党史研究室張聞天選集伝記組編張培森主編『張聞天年譜 1942-1976』下巻, 2000年 p.1133.
- 40 (前掲)『揪出反党, 篡軍老手彭徳懐示衆 - 大陰謀家彭徳懐反革命罪行專輯』1967年8月 p.17
- 41 社会主義建設の総路線, 大躍進, 人民公社を示す. 註5参照のこと.
- 42 中華人民共和国外交部档案馆「駐阿尔巴尼亚使館同阿方商談彭徳懐国防部長率軍事代表团訪阿有關事宜的談話紀要」档案番号109-02030-05 (1) では、軍事訪問団の日程について記され

ている。

- 43（前掲）『彭総在国外』 p.132～135.
- 44（前掲）『彭総在国外』 p.136～137.
- 45（前掲）『彭総在国外』 p.135～136.
- 46（前掲）『彭総在国外』 p.86～87.
- 47（前掲）「廬山会議前陪彭德懷訪東欧」『百年潮』 p.16（CNKIより引用）.
- 48（前掲）『建国以来毛沢東文稿』（1959. 1～1959. 12）第8冊 中央文献出版社，1993年 p.367, p.368, p.390～392,（前掲）『廬山会議実録』 p.184,「廬山会議における講話」矢吹晋編訳『毛沢東社会主義建設を語る』現代評論社，1975年 p.117, 原文：『毛沢東思想万歳』小倉編集企画 1967年（280頁） p.67等でフルシチョフの人民公社批判と毛沢東の反応が示されている。
- 49（前掲）『廬山風雲』 p.253では，8月1日の常務委員会で毛沢東よりこの種の疑いをかけられたとしている。
- 50（前掲）『廬山会議実録』 p.207.
- 51 徳田教之は，同じ中国共産党の50年代の政治闘争である高崗・饒漱石への問題を分析している論文でこうしたオフィシャルな決議文章に対しては，党の公式見解は，政治闘争の武器であり，真実をそのまま語るものではないとしている。（（前掲）『毛沢東主義の政治力学』 p.131）と分析している。しかし，今回の分析対象は，削られた部分，言い換えれば当時の中国共産党が隠したかった部分に注目し，いわば「共産党政治に特有の党内闘争の展開と，その処理の特殊な型への洞察，「秘密の言葉」の含意の解読力を必要とするのである。」（（前掲）『毛沢東主義の政治力学』 p.132）本論が対象とするこの決議文は，削られた内容であり，削除された決議文の意味を考察するものである。
- 52（前掲）『建国以来毛沢東文稿』第8冊 p.434～436.
- 53 軍事倶楽部とは，彭徳懷・張聞天・黄克誠・周小舟ら四人等が小集団を形成していて，その総称を軍事倶楽部としている。
- 54 「中国共産党八期八中全会關於以彭徳懷同志為首的反党集团的錯誤的決議」人民解放軍国防大学党史党建政工教研室編『中共党史教学参考資料』23国防大学出版社，1986年 p.119.
- 55（前掲）『中国大躍進政策の展開 資料と解説』下巻 p.107（原典）（前掲）「中国共産党八期八中全会關於以彭徳懷同志為首的反党集团的錯誤的決議」『中共党史教学参考資料』 p.119.
- 56（前掲）「中国共産党八期八中全会關於以彭徳懷同志為首的反党集团的錯誤的決議」『中共党史教学参考資料』23p.119～122 削除された六箇所は以下の通りである。
一番目は，（3） p.120 1.4～12「高崗～錯誤。」まで。二番目は，（4） p.120 1.25～28「彭徳懷～方法」まで。三番目は（4） p.120 1.29～30「在很多方面」の一言のみ。四番目は，（4） p.121 1.4～10「彭徳懷～反抗。因此。」まで。五番目は（5） p.121 1.24～28「同時～錯誤」まで。六番目は，（5） p.121 1.29～33「因此～方針」までである。

- 57 (前掲)「中国共産党八期八中全会關於以彭徳懐同志為首的反党集团的錯誤的決議」『中共党史教学参考資料』23 p.120 l.4～12 削除された部分の全文は以下の通り。「高崗は、計略上毛沢東同志を擁護しながら、劉小奇同志と周恩来同志に集中して反対した：かつ彭徳懐同志は却って毛沢東同志に直接反対し、同時に中央政治局常務委員のその他の同志にも反対し、同政治局の絶対多数と対立した。彼は党と党中央に対して今まで重視してこなかった、極めてわずかしか中央の指示を伝達しなかった。指示を仰ぐべきであった事柄も極めて少ししか中央に指示を仰がなかった、彼が指導していた部門は一種の独立王国と見間違えた。彼は常々中央に向かって民主を要求してきたが、彼は自らの仕事の中では最も民主的ではなかった、最も専制的で、個人の「小局」のみに気をとられ党の「大局」には注意しなかった。彼は同じ人民解放軍の十大元帥の中で彼を除く九人の元帥との関係は劣悪だった、かつ部下に対しては粗暴専横でさらに耐え難い程度のものであった。彼の軍事工作の中には軍閥主義の思想と方法があって、長期間根本改造できなかった。朝鮮中国人民志願軍工作期間、中央の指示に背反してから、彼は大国主義の誤りを犯した」。
- 58 (前掲)「中国共産党八期八中全会關於以彭徳懐同志為首的反党集团的錯誤的決議」『中共党史教学参考資料』23 p.120 l.25～28、削除された部分の全文は以下の通り。「彭徳懐同志は、マルクス主義者の看板をあげていて、口では社会主義を語っているが、實際上の頭の中は資産家階級の個人英雄主義、資産階級の極端な虚偽の所謂「自由平等博愛」思想、かつまだ封建的な残りかすがある。彼の世界観、人生観と思想方法は資産階級の経験主義と唯我論(独我論)主義の世界観、人生観と思想方法である」。
- 59 (前掲)「中国共産党八期八中全会關於以彭徳懐同志為首的反党集团的錯誤的決議」『中共党史教学参考資料』23 p.120 l.29～30、削除された箇所は、「多くの方面で」、この一言のみである。
- 60 (前掲)「中国共産党八期八中全会關於以彭徳懐同志為首的反党集团的錯誤的決議」『中共党史教学参考資料』23 p.121 l.4～10、削除された部分の全文は以下の通り。「(彭徳懐同志は、実質上一人の党内の資産階級革命家である以上、彼は資産階級民主革命の中でまだ積極的であり、帝国主義及びその手先に対しての党争はまだ堅持している。しかし、彼は無産階級のマルクスレーニン主義の世界観、人生観と思想方法を掌握していないから、民主革命の大衆運動を迫害し、彼は民主革命に対しての方法も常々誤りを犯して、幾つかの重大な路線の誤りも含まれている。社会主義革命の時期までは、状態は違う。彼は、社会主義に対して党の長期的教育から幾つかの願望があるけれども、しかし社会主義革命に対しては実際上の精神準備がない。社会主義が真に到来し、資本階級と小資産階級の生産手段私有制が終わらせられたときに、彼の資産階級思想は反抗せざるをえなくなる。だから、) 農業、手工業、資本主義工商を社会主義改造したばかりの時に、彼は高崗と同じく結合して反党活動を進行させてきた。」の()部分。
- 61 (前掲)「中国共産党八期八中全会關於以彭徳懐同志為首的反党集团的錯誤的決議」『中共党史

- 教学参考資料』23 p.121 1.24～28, 削除された部分の全文は以下の通り「(同時に、彭徳懐同志は過去党の正確な指導下において有益な革命の仕事をしてきたと言う見地から、彭徳懐同志の思想には革命と反動の両面があることを鑑みて、即ち反無産階級で、反マルクスレーニン主義の一面があり、また反帝国主義、反封建主義と大変曖昧であり、社会主義を要望している一面もある、従って彼は過去に幾度か、この種の時期まで路線の誤りを犯してきた、党の援助から、まだ後ろを振り返ることが出来る。彼はすでにこの全会大会上に出た自己の誤りを是正したいと表明している点を鑑みて、) 八期八中全会で認められた：党は彭徳懐同志に対して依然として溢れるばかりの熱情での態度を用いるべきであり、彼の認識と自己の誤りを是正するのを援助する。」の（ ）部分。
- 62 (前掲)「中国共産党八期八中全会關於以彭徳懐同志為首的反党集团的錯誤的決議」『中共党史教学参考資料』23 p.121 1.29～33, 削除された部分の全文は以下の通り。だから、党は依然として基づいて「団結からの出発を希望し、批評あるいは闘争を経過し、矛盾にて解決できる、新しい基礎の上から新しい団結に到達する」方針で、「以前の失敗を戒めとして将来に対し注意を加え、欠点や過ちを批判して立ち直るのを助けること」を基礎として、「批判は厳しく処置は寛大に」の方針を基礎にして、彭徳懐同志が自己の誤りを認識し是正する条件下で、彭徳懐が同志の団結を保持することを継続することを希望する。その他の彭徳懐同志と共に誤りを犯した黄克誠、張聞天、周小舟などの同志に対しても党は同様の方針をとる。
- 63 彭徳懐は、政治思想をマルクス主義的ではなく資本主義的であると批判されたため、廬山會議後に彭徳懐がマルクス主義学習に向かう理由であると推察される。彭徳懐著『彭徳懐軍事文選』中央文献出版社、1988年の中でマルクス主義への読書ノートを残している。
- 64 (前掲)『廬山風雲』p.253.
- 65 (前掲)『中国大躍進政策の展開 資料と解説』下巻 p.107 (原典) (前掲)「中国共産党八期八中全会關於以彭徳懐同志為首的反党集团的錯誤的決議」『中共党史教学参考資料』23国防大学出版社、1986年 p.119.
- 66 (前掲)『彭徳懐伝』当代中国出版社、1993年 p.642によると會議は平行して同時に進められたとある。
- 67 この講話に関しては、二つの資料に分割されているとの指摘が東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳』上巻 三一書房、1974年 p.429にある。そこで、前半部分が記載されている『毛沢東思想萬歳』1967年8月原文復刻版、現代評論社、1974年(716頁)、後半部分が記載されている『毛沢東思想万歳』小倉編集企画、1967年(280頁)、全文が記載されている東京大学社会科学研究所蔵の『毛沢東思想万歳』(11B 資料 NO.245272)の三冊を使い該当箇所の抽出を行っている。ただ、(前掲)『建国以来毛沢東文稿』第8冊 p.522～524では、「在中央軍委擴大會議上的講話提綱」に記載されている文章の一部が上記の文献には記載がない。より具体的内容であるため、提綱ではあるが、こちらの部分も引用した。

- 68 (前掲)『毛沢東思想万歳』上巻 三一書房, 1974年 p.434.
- 69 (前掲)『彭徳懐伝』 p.642.
- 70 (前掲)『彭徳懐伝』 p.678~680.
- 71 第二稿と劉少奇がその第二稿を基に行った講話では内容が異なる。これは薄一波によると劉少奇はこの第二稿をそのまま読まずに、報告を基にして補充して説明したとされているためである。薄一波『若干重大決策与事件的回顧』下巻, 中共中央党校出版社, 1994年 p.1017.
- 72 劉少奇『劉少奇選集』人民出版社, 1985年 p.349~417.
- 73 (前掲)『劉少奇選集』人民出版社, 1985年 p.424と下記紅衛兵資料と対比した結果、『選集』にはこの箇所の記載がない。ただし、「本書に収めるにあたり、一部を削除した」との記載がある。
- 74 例えば(前掲)『彭徳懐伝』 p.678~680.
- 75 劉少奇「劉少奇在拡大的中央工作會議上的講話」(1962.01.27) 米中国文化大革命文庫光盤編集委員会編集宋長毅主編石之瑜他編『中国文化大革命文庫』第二版, 2006年.
- 76 原文は「颠覆」となっている。
- 77 (紅衛兵資料) 北京市人委機關摧旧兵团『彭真在廬山會議的前後』1967年9月 p.13.
- 78 徳田は、高岡に関する研究の中で、彭徳懐、劉少奇と文革期に批判された指導者は、高岡との関係を指摘され批判されている点を指摘し、共通した批判の形式の可能性を指摘している。徳田教之著『毛沢東主義の政治力学』慶応通信, 1977年 p.170.
- 79 毛里は、1959年のフルシチョフのアイゼンハワーとの会談で、米ソ友好の新時代を謳歌していることに中国側が反発し、対立が拡大した点を指摘している。山極晃・毛里和子編『現代中国とソ連』日本国際問題研究所, 1987年 p.107~108.
- 80 『プラウダ』紙論説「毛沢東とその一派のソ連政策について」1967年11月27日 刀江書院編集部編訳『毛沢東—その思想と政策』刀江書院, 1971年 p.115~116.
- 81 (前掲)『彭徳懐伝』 p.678ではこの仲間の復活に関しては触れられていない。また、内容も若干異なる。毛沢東が挿話で「国際背景がない」と言っていることになっているが、それは他の軍事倶楽部のメンバーであり、この資料によると彭徳懐はそこに含まれていないのである。
- 82 毛里和子著『現代中国政治』名古屋大学出版会 p.221.
- 83 岡崎邦彦「毛沢東と七千人大会—大躍進・調整・七千人大会—1—」『東洋研究』大東文化大学東洋研究所110号, 1994年 p.84でも1962年の政策変更は、1959年に彭徳懐が提議した政策と酷似している点が指摘されている。
- 84 廖盖隆等編『当代中国政治大事典1949~1990』吉林文史出版社, 1991年 p.633.
- 85 (前掲)『黄克誠自述』 p.268, 周小舟の自殺以外で、批判された人間の名誉回復過程は、七千人大会以後、歴史決議以後で彭徳懐、張聞天を除いては分からなかった。
- 86 (前掲)『張聞天年譜 1942-1976』下巻 p.1214.
- 87 (前掲)『張聞天年譜 1942-1976』下巻 p.1221~1222.

About Foreign Betrayal Criticism to Peng Dehuai of 1962

SUGITA Toru *

Abstract

Peng Dehuai was the officer who acted as a national defense director of Chinese People's Republic, but, in Lushan meeting in 1959, he was subjected to the virtual downfall. In the meeting, he made a private message named "Peng Dehuai opinion book" and it was criticized and was subjected to the downfall. In the meeting, various downfall reasons have been examined by then supreme leader Mao Zedong.

This article analyzes process and contents of the foreign betrayal criticism. At first I analyzes the criticism resolution in the process of the military affairs visit to corps in Soviet Union and Eastern Europe. Next I surveyed an opposition factor of the Sino-Soviet from a point that aggravation of the Sino-Soviet confrontation was related to the downfall and the Lushan meeting, the Liu Shaochi lecture in Seven Thousand Cadres Conference, pointed out in a conventional precedent. I could not find the downfall factor of Peng Dehuai from an opposition factor of the Sino-Soviet in this., Xiao Hua criticized Peng Dehuai as a dogmatist adversely again on his Communist China Central Military Commission in 1958. I was not able to find the foreign evidence to assume that he communicated secretly in the trip of the visit. Foreign country betrayal was added in a downfall reason when he was criticized because his opinion book continued being recognized by the comparison between resolution and Liu Shaochi lecture in Seven Thousand Cadres Conference, and there was "the background with the foreign country". As for the conclusion of the main subject in the opinion book which Peng Dehuai submitted this foreign betrayal criticism appeared for a formula in Seven Thousand Cadres Conference in 1962, after the Lushan meeting, foreign country betrayal was added in the letter of a crime newly as summary of the Great Leap Forward policy and a common policy change was performed, but there was no responsibility investigation of the leadership. The foreign betrayal criticism for Peng Dehuai was to make him a scapegoat without a necessary responsibility investigation for the Chinese communist party to achieve policy U-turn.

Keywords

Peng Dehuai, Lushan Meeting, Seven Thousand Cadres Conference, Military Visit Group, Foreign Betrayal, Doctrinairism

* Correspondence to : SUGITA Toru
Graduate School of Politics, Hosei University
2-17-1 Fujimi, Chiyodaku, Tokyo 102-8160
E-mail : tsugita@f2.dion.ne.jp